



自分の好きなこと

朝日新聞GLOBE（4月21日）から引用してみよう。

＊

グーグルは4月1日、「グーグルノーズ」という名のサービス紹介をウェブサイトに掲載した。スマートフォンなどで香りを検索して実際に嗅ぐことができる、という触れ込みだった。エープリルフールのジョークだ。

東京工業大学教授の中本高道は、そんなジョークを現実のものにする研究を進めている。基本的な「においのもと」を組み合わせることで、いろいろな香りを自由自在に再現する技術だ。

香りの再現に不可欠となる調香装置の原型を見せてもらった。分厚いA4ファイルくらいの銀色の箱で、パソコンにつながられている。内部には試験管のような13本のガラス瓶が整然と並び、それぞれ上部から細いチューブが伸びる。この瓶に各種の「においのもと」を入れておき、パソコンから送られてくる配合データをもとに調香する。

香りやにおいは、限られた種類の「においのもと」の組み合わせで表せるのではないか。だとすれば、必要な「においのもと」と配合データを手元にそろえることで、思いのままに香りを再現できるはずだ――。中本は、そう考えて研究を進めてきた。

中本はこれまで、ラベンダーやジャスミン、ローズマリーなどアロマセラピーで使う158種類の精油から30種類の「においのもと」を抽出。それらをもとに、ペパーミントやオーガニックオレンジ、ブラックペッパーの香りを再

現することに成功している。

香りを構成する「においのもと」の配合データを、インターネットを通じて離れたところに送るのは容易だ。先方に調香装置があれば、届いたデータをもとに香りを再現することができる。映像や音声のように、香りを別の場所に送信できることになる。

だが、現実には、そう甘くない。香りの配合データは複雑で、忠実に再現するには多種多様な「においのもと」を用意しておかないといけない。巨大な調香装置が必要になってしまう。

中本は言う。「色は三原色ですべてを表せる。それに相当するものが、香りではわかっていない」。できるだけ少ない「においのもと」で幅広い香りを再現できるかどうかがかギだ。

＊

世の中には色々な研究があるものだ。そして、それを私たちは知らないでいる。

以前、同じ GLOBE で恐竜特集があり、その時、恐竜学者になるためにはどんな勉強をすればいいのかという質問に対して、「CGの勉強をする」という答えが掲載されていた。発掘された骨格から実物の恐竜を想定する際、CGの技術が要請されるからであるとのことだった。常識的に考えると恐竜学＝CGという発想は生まれにくい、現場では必要とされているのである。

進路を考えるのは大変だ。ただ、狭い自分の視野や常識だけにとらわれることはない。その世界に飛び込めば、そこから新しい視野が広がることもあるからだ。まずは自分の好きなことを見つけること。それがスタートだ。